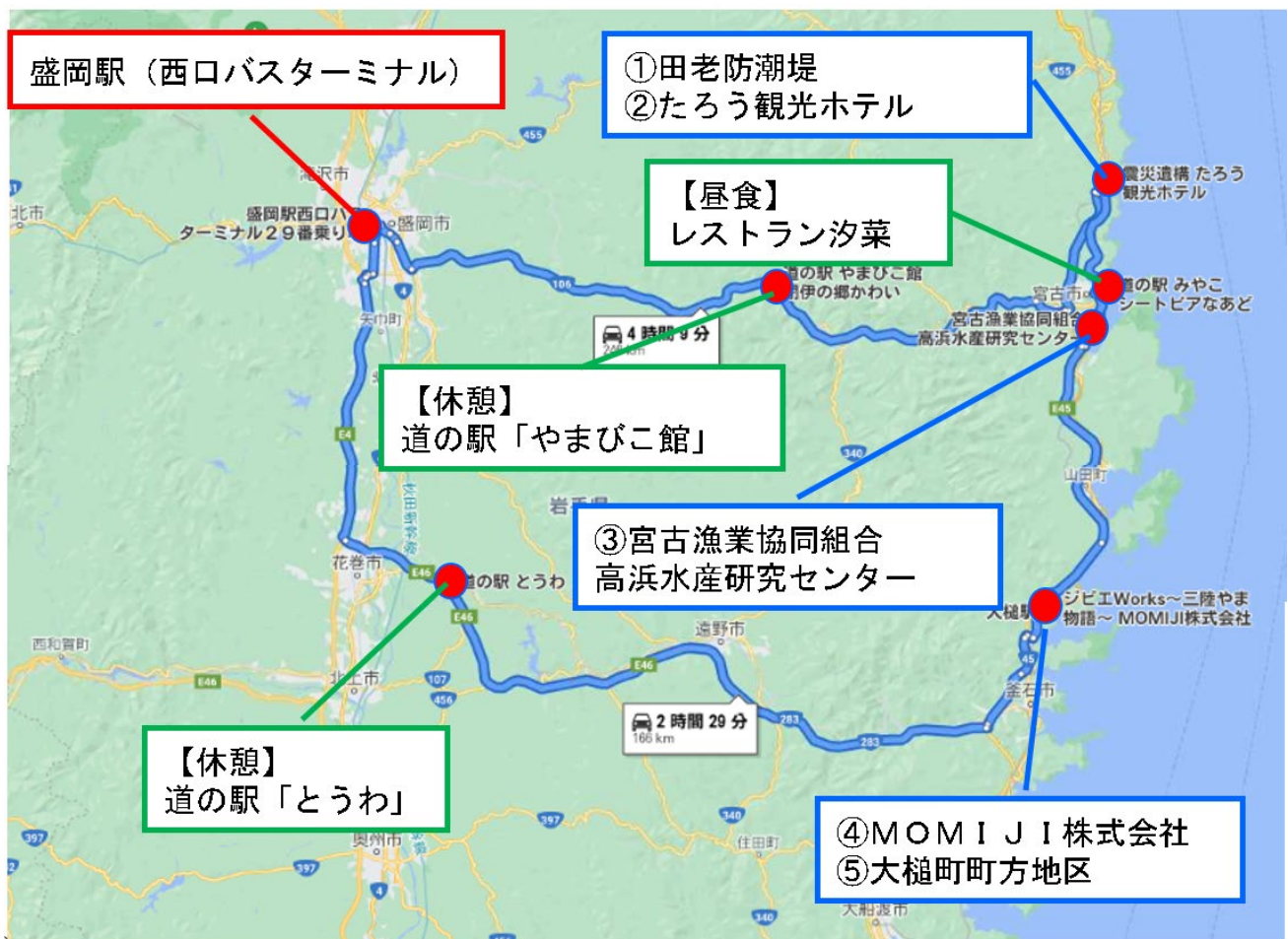


岩手県現地調査結果報告【奥野委員報告資料】

- (1) 実施日：令和3年10月8日（金）
- (2) 訪問先：岩手県宮古市、大槌町
- (3) 参加者：伊藤委員長、白浪瀬委員長代理、奥野委員、山崎委員、山名委員、若菜委員、渡邊委員
- (4) 行程：
- (A) 宮古市
- ① 震災伝承施設 田老防潮堤
 - ② 津波遺構 たろう観光ホテル
 - ③ 宮古漁協高浜水産研究センター（宮古市養殖事業）
- (B) 大槌町
- ④ MOMIJI 株式会社（大槌町ジビエソーシャルプロジェクト）
 - ⑤ 大槌駅屋上



(5) 結果報告 :

(A) 宮古市

① 震災伝承施設 田老防潮堤

視察先概要 :

明治・昭和の大津波を教訓として、45年の歳月をかけ完成した長大な防潮堤。高さ10mの二重防潮堤で防災のシンボルであったが、東日本大震災の津波は防潮堤を超え、田老の町に甚大な被害を及ぼした。

➤ 山本宮古市長からの説明の概要は、次のとおり。

- 田老町は、明治以降3回、大きな津波に襲われた。明治29年や昭和8年の津波襲来後は、防潮堤整備や集落再建を行った。平成23年の東日本大震災後は、防潮堤整備及び高台移転を行った。田老町は津波と生きてきた町であり、東日本大震災だけでなく、この町の歴史を見てほしい。
- 復興は道半ばである。防潮堤などのハードはこの10年で整備できたが、想定していた商店街はまだ完成しておらず、移転元地の有効活用もまだ出来ていないと考えている。
- 震災から年月が経つと津波の恐ろしさを忘れてしまうので、たろう観光ホテルなどを通して、伝えていきたい。



田老防潮堤での黙とう



山本宮古市長からの説明

➤ (所感)

- ・田老町は、これまで津波と共生してきた歴史的な町であることに深い感銘を受けた。山本宮古市長の説明から、町民の方々の自然への畏怖と畏敬の念を感じ、「生きる」ということに研ぎ澄まされた感覚があることに心より尊敬の気持ちを抱いた。

- ・商店街の復興はこれからであることがわかり、田老町が甚大な被害から本来の機能を取り戻すまでに多くの時間がかかることを改めて認識した。このような事実を発信していく必要性を感じた。
- ・今後は、移転元地の有効活用のための方法や進め方について、外部からの支援が必要であれば要請していただくことが良いかもしれないと感じた。

② 津波遺構 たろう観光ホテル

視察先概要：

津波により1・2階部分が鉄骨のみとなり、部屋を消失。災害の記憶を後世に伝えるとともに防災意識の向上や観光産業の活性化等の効果を期待し、宮古市が津波遺構として保存。震災時にホテル6階から撮影した映像を、観光協会が行う「学ぶ防災ツアー」で訪れた人に上映。

➤ 佐々木ガイドからの説明の概要は、次のとおり。

- たろう観光ホテルは、津波遺構第1号として保存されている。地震が発生した午後2時46分は、ホテルのチェックイン前であったため、宿泊客等はおらず、従業員も避難したため死者はいなかった。社長はホテル6階の客室に残り、津波の映像を撮影した。
- 震災を知らない世代に、津波の恐ろしさを伝えるのは難しいと感じているが、この映像を通して、津波の怖さを学んでいただけていると思う。新型コロナウイルス感染症拡大以前は、年間約2万人の方々が訪れていた。
- 見学に来てくれた中学生が、教員になり引率する立場でまた来てくれたことが、個人的に感慨深いとともに、次代への継承を感じた。全国の方々と一緒に、東日本大震災だけでなく、阪神淡路大震災や新潟県中越地震などの災害について考えることができる非常に大事な場所であり、後世に残していきたいと考える。



たろう観光ホテルの視察



映像を交えた佐々木ガイドからの説明



たろう観光ホテルでの集合写真

➤ (所感)

- ・たろう観光ホテルの社長が撮影した津波の映像は、私の想像をはるかに超えるものであった。津波が彼方に見える防潮堤を越えたとわかった次の瞬間に、海から距離があるたろう観光ホテルを一撃していることに衝撃を受けた。一人でも多くの方がこの映像を見る機会があればいいと思う。
- ・たろう観光ホテルを震災遺構として残すことには、きっと多くの議論と葛藤があったことを想像する。田老町の方々は震災遺構を見るたびに辛い気持ちにもなるかもしれない。しかし、その決断によって被災した方々が、被災しなかった方々への人間愛を提示されたように受け止めた。
- ・観光協会が行う「学ぶ防災ツアー」としての事業には、町の方の情熱と心意気を感じ、これからも応援していきたいと強く感じた。

③ 宮古漁協高浜水産研究センター（宮古市養殖事業）

視察先概要：

震災後の秋サケ等の不漁に対する危機感から、宮古市が養殖調査事業（令和元・2年度）として、海面養殖（宮古トラウトサーモン）と陸上養殖（ホシガレイ）を宮古漁業協同組合に委託。陸上養殖（ホシガレイ）はセンター内にて実施。令和3年度は、ホシガレイについては引き続き宮古市の養殖調査事業として宮古漁協へ委託されているが、宮古トラウトサーモンについては宮古漁協の単独事業として本養殖事業を継続。

➤ 山本宮古市長からの説明の概要は、次のとおり。

- 「トラウト」の海面養殖については、第1期（令和元年～令和3年）から水揚量・水揚げ金額ともに目標を上回り、第2期（令和3年～）も順調に推移した。水揚げを増産するためには漁業権の免許、第1種区画漁業権の免許が必要となるところ、令和3年10月上旬に免許取得。さらなる種苗の確保が課題となっているが、将来的には種苗生産、中間育成、海面養殖の一貫した体制の構築を目指している。

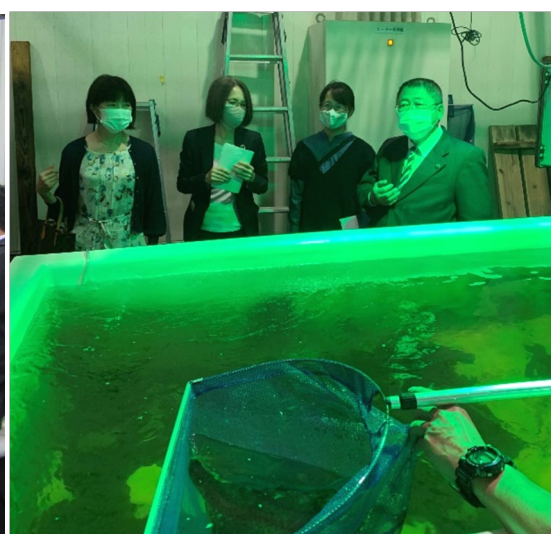
- 「ホシガレイ」の陸上養殖については、全国初の市場流通の取組で、事業を通じて緑色 LED 光環境の優位性を確認した。一方で夏の暑さや酸欠によるへい死により、1,000 尾の出荷を想定していたが、500 尾弱の出荷にとどまるなど、今後改善すべき課題もある。

➤ 芳賀高浜水産研究センター長からの説明は、以下のとおり。

- 施設内には緑色 LED 光を照射する水槽と自然光の水槽の 2 種類があり、生育状況ごとに水槽を分けている。最も大きい個体を飼育する水槽には約 50 匹おり、緑色 LED 光を照射しているものの方が活発に動き回り、餌を食べる量も多い。餌はペレット状の配合飼料を使用しており、酸欠によるへい死の対応として酸素を送り込むポンプを複数設置している。



山本宮古市長からの説明



施設内部を視察



センター前での集合写真

➤ (所感)

- ・山本宮古市長の説明から、震災後の秋サケ等の不漁を予防する取組としての海面養殖と陸上養殖の事業では、行政と専門家の良好な連携によって進められていることを実感した。宮古漁業協同組合が、復興に向けて積極的に取り組んでいることが印象的であった。
- ・「ホシガレイ」の陸上養殖を見学し、養殖現場の臨場感を肌で感じた。緑色 LED 光の照射により効果的な養殖ができることなど、水産研究の知見が取り入れられていることがとても素晴らしいと感じた。
- ・養殖事業が気候の影響を受けることでその大変さを知り、養殖も漁業の一環であること、自然との関わりが大きいことに新たな気づきを得た。

(B) 大槌町

④ MOMIJI 株式会社 (大槌町ジビエソーシャルプロジェクト)

視察先概要：

鹿による獣害対策、地域資源を活かした新たな産業創出、所得向上や関係・交流人口の拡大を図るため、官民連携でジビエの加工・販売、人材育成等を行う事業を推進。令和2年度から同事業を持続的に行うため、大槌ジビエソーシャルプロジェクト（観光客誘致、ジビエ販促、ハンター育成）を開始。令和2年5月よりMOMIJI(株)による食肉処理加工施設が稼働。

➤ 平野町長からの説明の概要は、次のとおり。

- 震災からの復興が徐々に進み、道路等が整備されてこれからというときに新型コロナウイルス感染症が流行した。役所をあげて、町をあげて、何かしようというときに本プロジェクトが始動した。規模はまだまだ小さいと考えているが、若い人たちが先頭を走る官民連携の本取組によって町全体に活気がもたらされている。
- 放射能も課題であったが、県や周辺自治体などと協議を重ね、令和2年に出荷制限が解除されたため、本事業がいよいよ動き出したところ。最近では、町民の認知度も高まっていることを実感しており、若者たちの熱い気持ちをさらに前に進めていきたいと考えている。

➤ 藤原代表取締役 (株)ソーシャル・ネイチャー・ワークス) からの説明の概要は、次のとおり。

- (冒頭、プロモーションムービーを上映)
- 本事業のきっかけは、大槌町キッチンカープロジェクトのプロジェクトマネージャーの委嘱であった。大槌町復興推進隊という制度で3年間活動した。「害獣」という言葉を無くし、特に子どもたちが鹿と共存するという意識を持ってくれるようにしたい。

- ジビエの工場は全国に約 700 か所点在しているが、東北は少なく、岩手県については昨年オープンした当工場が第 1 号であった。町民、行政、猟友会が一堂に会した際は歩み寄ることが難しい状況であったが、地域共通の課題としての認識を持てるよう心掛けた。本事業で最も重要なことは、各方面との調整を行うコーディネーターであると痛感している。
- 令和 2 年度からは「大槌ジビエソーシャルプロジェクト」ということで、ジビエを中心とした一体的な取組を実施している。特徴的なのが、食肉や工芸品を一連の物語にすることで大槌町への訪問に繋げる点である。これによって新規のハンターも増えており、昨年度 1 名だった新規登録者が今年は 26 名となっている。
- ポケットマルシェの畜産ランキングで 4,500 以上の事業者中、13 位を獲得した。割烹料理店とのコラボレーション、プロ野球楽天の試合会場でのキッチンカー出店などを展開しており、「鹿肉・害獣」というイメージから、「ジビエ」というイメージ転換も進んでいる。
- 復興庁「新しい東北」復興ビジネスコンテスト 2020 において優秀賞を受賞し、現在は「地域団体商標」を「岩手県×ジビエ」で目指しており、県内 4 市町村から参加の希望があったところ。

▶ 兼澤代表取締役（MOMIJI 株）からの説明の概要は、次のとおり。

- ジビエのガイドラインでは 2 時間以内の処理が示されているが、MOMIJI 株ではさらに厳しく、若い鹿を 1 時間以内に処理することで、臭みがなく、舌触りが良いという品質を保っている。2 時間経過したものは腐食が進んでしまい、臭みが残ってしまう。
- 放射能については、県の施設で全頭検査を行っているが、基準値である 100 ベクレルを超えたことは一度もない。岩手県は簡易検査を挟まず、最初から全頭本検査に進む。
- ハンターは基本的に 1 日中猟をしたいと考えているため、ジビエ肉の品質という観点は二の次になっている。全国のジビエ肉を試食しているが、鹿特有の臭みがあるものがほとんどである。鹿肉を身近にするため、地域の小学校の給食に取り入れるなどの取組を進めている。



平野大槌町長からの説明



加工場の視察



MOMIJI 株式会社での集合写真

➤ (所感)

- ・平野大槌町長の説明から、行政が若い人たちの意思や意見を尊重していることが伝わった。そのようなスタンスが、復興に向けての官民連携を大変効果的に機能させているといった印象を受けた。
- ・ジビエソーシャルプロジェクトは、被害をもたらす野生動物を「害獣」として捉えるのではなく、「大切な命をいただく」といった考え方を持つことは、子どもたちの教育にも必要であると感じた。復興に向けた事業が、多くの学びにつながることに感銘を受けた。
- ・ジビエのガイドラインを遵守するだけでなく、猟をしてから1時間以内の処理を行っていること、また、全国のジビエ肉を取り寄せて試食されていることなど、品質向上のためにあらゆる角度からの努力と工夫をされていることに、プロジェクトに対する大きな熱意を感じた。

⑤ 大槌駅屋上

視察先概要：

人口の減少、事業所などの体力低下や廃業、空き地（未利用地）の増加という現状の中、大槌駅の裏地を活用した産業活用を推進。自然湧水を利用した、岩手大槌サーモン養殖事業やワサビなどの水耕栽培について、ハンズオン支援事業の活用を検討。

➤ 平野大槌町長からの説明の概要は、次のとおり。

- 高台移転の元地について、公園やサッカー場として利用しているが、残り 6 ha が未利用となっている。雇用創出のために、湧水を利用した事業の検討を開始した。湧水を利用した事業計画の構想は以前からあったが、住民の生活再建を優先したため、発災後 10 年間では難しかったが、ようやく具体的な計画を考えられるようになった。
- サーモンの海面養殖を試験的に開始し、去年は 85 トン、今年は 320 トンを出荷した。稚魚養殖が課題で、成魚を 2,000 トン生産するという目標を達成するためには、湧水を利用した町内一貫生産が必要である。官民一体となって取組を進めている。
- そのほかにも湧水を利用したワサビ、クレソンの水耕栽培を検討しており、湧水を使ったブランディングを進め、雇用の確保を含め特産品の創出、産業の活性化に期待している。
- ハンズオン支援事業として、稚魚養殖・水耕栽培それぞれの課題整理、整備手法・財源、運営体制・手法の検討など事業実施のための周辺整理、課題解決を図り、地域活性化を図っていく。
- ジビエ事業や海面養殖事業のように、若手が自ら立ち上がり熱意を持って取り組むことが地域を活性化させ、ひいては地域住民の心のケアに繋がっている。



平野大槌町長からの説明

➤ (所感)

- ・平野大槌町長の説明から、大槌町の人口減少という事態に向き合いながら、さまざまなプロジェクトに取り組んできたこと、また、自然湧水の利用などの新しい事業についても考案されていることがわかった。
- ・雇用の確保といった観点から新事業の展開は必要であり、大槌町にとっては財源や運営体制についての課題の解決に関して支援があれば助かると感じた。
- ・今後も、若手が主体性をもった独自の企画を援助できるような官民連携のさらなる推進を願う気持ちになった。